

「赤い鳥小鳥、なぜなぜ赤い、赤い実を食べた」 三輪芳朗

一九七〇年頃に高度成長期が終りに近づくまで通産省流の産業戦略は体系化されなかった。産業政策として明示されることもなかった。しかし戦後日本のエリート産業官僚の多くはかつての重要な経験に基づいて形成した産業転換を実現する方策に関する重大な構想を持っていた。一九三〇年代から一九四〇年代初頭の時期の満州における恐るべき産業基盤の強制的創出の経験である。駆け引きと無縁な、集権的で厳格に管理された産業国家が、国家目的に対するあらゆる脅威に対抗するために柔軟に資源を配置するという構想

である。この構想は、石原莞爾（満州侵略時の関東軍参謀であり一九三〇年代半ばの参謀本部主要課長の一人であった）のような軍のリーダーのみならず、岸信介（一九五七―一九六〇の総理大臣）、椎名悦三郎（一九六四―一九六六の外務大臣）、佐橋滋（一九六四―一九六六の通産省事務次官）などの当時在満の産業官僚の多くを強く鼓舞した。椎名の表現によれば、彼らの多くが満州を日本産業の「壮大な実験場（“great proving ground.”）」と見た。

「政府主導型」経済発展

Princeton political scientist, Professor Kent Calder の *Strategic Capitalism* (1993) の「第2章 戦略とその試練」の、「政府部門の主役たち」の冒頭に位置する *The Chief Strategist: MITI* の一部である。日本人によるものか否か、日本研究者によるものか否かのいずれをも問わず、英語で刊行される日本経済に関する研究書・教科書・読み物の多くに共通して現れる次のような「見解」を象徴的に反映する。特異・特殊なものではな

い。

明治維新以来の日本の経済発展は「政府主導型」であった。これを主導した日本政府は、その富国強兵策の延長線上に、周到な計画に基づく戦争準備を実施した。信用と非金融部門の資源配分の両面にわたる強力な control（政府による管理あるいは統制）が準備作業の基盤となった。満州（国）における華々しい成果とその経験に基づく日本の戦時統制の成功という実績と体験は戦後日本にも引き継がれた。「産業政策」がその象徴である。軍部が戦前の戦争準備と戦時の「動員」を主導した。岸信介・椎名悦三郎などの「革新官僚」の多くが軍部と協調し、統制作業の中心に位置した。敗戦とともに軍部は解散したが、多くの「革新官僚」が戦後の政権党である自由民主党の指導者となり、通産省など

を通じる介入主義的「産業政策」を実施した。戦前・戦後を一貫して、政府の介入主義的な政策が日本の経済発展を主導した。

「通説」「常識」「通念」における 満州（国）の特別の位置

われわれ（筆者とハーバード大学の J. Mark Ramseyer 教授）の、戦後の「産業政策」、先行する「傾斜生産」政策、さらに明治以来の富国強兵・殖産興業政策の有効性に関する「通説」「常識」「通念」と異なる見解の提示は、例外なく次のような批判・非難に直面した。「満州（国）における華々しい実績と、その経験を踏まえた戦時統制の画期的成果を知らないのか？」「戦争を目的としたという不幸な経緯はともかく、政府主導で急激な経済発展を実現したという実績まで無視するのか？」「満州と日本の双方における

経済統制を指導した岸や椎名を知らないのか？」「軍部と協力し戦時統制を主導した革新官僚の多くが戦後も政策決定者の地位に留まり戦後の（経済）政策上の意思決定を主導したという現実まで無視するのか？」などとする冷笑、そのような「歴史的事実」を認識していないあるいは無視しているとする非難・批判である。戦前・戦中の商工官僚などが、戦後は政権党である自由民主党の中心的存在として強力な「産業政策」を成功裏に推進したというのだ。

次の八つの設問について自問して欲しい。

(1) 一九三〇年代初頭から「恐るべき産業基盤の強制的創出」作業を開始したとしよう。一九四〇年代初頭までの一〇年程度の期間に何を実現し得たか？

(2) 「産業基盤」の創出に必要な治安の安定をようやく確保し、満州

医療改革

立
二本 立
危機から希望へ 改革の特徴と帰
結を検証。希望の芽とは。2835円

社会福祉学 〈科学〉性

三島 亜紀子
ソーシャルワーカーは専門職か？
科学・物語・政治の歴史。3150円

不安定雇用という 虚像

依藤 博樹・小泉 静子
パート・フリーター・派遣の実像
働き方の多様性に迫る。2100円

階層化する社会意識

吉川 徹 編著
職業とパーソンナリティの計量社会
学 産業社会の序列構造。3360円

格差のメカニズム

浜田 宏
数理社会学的アプローチ 所得分
配の不平等と相対的剥奪。3150円

近代経済成長を 求めて

浅沼 信輔・小浜 裕久
開発経済学への招待 クズネッツ
の概念を基に発展を考察。2940円

分権時代と自治体法学

兼子 仁 先生古稀記念論文集
一層深化を遂げる兼子自治体法学
の更なる発展を目指す。13650円

アブダクション

米盛 裕二
仮説と発見の論理 パース思想の
根幹をわかりやすく解説。2940円

*価格税込

勁草書房
TEL 03-3814-6861
FAX 03-3814-6864

〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1
<http://www.keisoshobo.co.jp>

(国)の経済開発計画の作成を開始したのが一九三〇年代半ばであった。残る五年程度で何ができたか？「計画」を実質的に実施できたか？

(3) 一九三七年七月には日中戦争が開始された。一九三〇年代後半の時期に、未開発の満州に本格的な「産業基盤」を創出する「力」「余力」「意欲」が日本政府にあった(残されていた)か？「建設」の推進が賢明な選択となり得たか？

(4) 「産業基盤」の具体的内容は何か？一九三〇年代後半に話題となった開発計画の焦点は、自動車と航空

機を製造する工業の建設・移転であった。この構想は現実的・合理的か？数千点・数万点の部品からなる製品を製造するこれら加工組立型工業は、膨大な数の部品メーカー・下請工場を必要とする。工業集積のほとんど存在しない当時の満州はその立地として適切ではないか？そのような立地を選択することのコストは著しく高く、目標到達に長い時間を要しただろう。そんなことを「計画」し実施したのか？関係する(ように見える)「計画」のほとんどは「机上の空論」ではなかったか？

(5) 「日露戦争によって獲得された勢力圏たる南『満州』への半植民地的支配を強化するための『国策』機関として位置づけられ、政府による強い保護と監督の下におかれ……『国策』実施の中心機関としていわば『間接的』に経済的支配を強化すること」を「使命」とした南満州鉄道株式会社(満鉄)は、「治安維持のために必要な鉄道建設そのものが、治安不良のゆえに遅延する」状況にあった(原朗)。このような満州(国)で、「統制」「計画(化)」を通して何が実現可能だったか？「恐るべき産業基盤の強制的

創出」という企図が短期間に華々しい成果を挙げ得たか？

(6) 自動車と航空機を製造する工業の建設・移転はほとんど実現しなかった。「産業基盤」として何が実現したか？ 実現に成功した具体的事例について聞いたか？ 知っているか？ 聞いた事例の内実は「恐るべき産業基盤」と呼ぶに値するか？

(7) 岸や椎名を象徴とする官僚（革新官僚）が、そのような企図を短期間に実現可能な「政策」として「計画」し、積極的に推進したか？ 「計画」し、「政策」を積極的に推進したとしよう。彼らが戦時期の経験に基づいて戦後期に実施した「産業政策」は有効に機能したか？ 彼らの「政策」立案・実施「能力」を信頼するか？ 「戦時体制」下で「消極的」に協力した（有能な官僚として「協力」的に振舞った）のであり、戦後の「産業政策」についても有効性が著しく限

られることを十分に承知していたと考えないか？ 戦後も継続した「計画」「計画化」ブームの下で、政治家として「世論」の期待に応えたのではないか？

(8) 以上のような疑問を提示することなく、論拠・証拠を明示せず、満州（国）における「恐るべき産業基盤の強制的創出」という企図や経済開発（政策）が大きな成果をあげたとする「通念」を支持し唱導し続ける歴史家・元官僚および彼らを象徴とする多くの識者・「知識人」の判断を信頼するか？ 彼らの主張を受け入れ続けるか？

「社会主義計画経済礼賛」と スターリン独裁下ソ連の「計画化」

一九三〇年代半ばから一九五〇年代初頭までの時期を「計画化」の時代と呼ぶ見方が今日も支配的である。スタ

ーリン独裁下ソ連の第一次五カ年計画（一九二八年―一九三三年）を象徴とする「社会主義計画経済礼賛」の圧倒的影響力の下で戦後に「通説」となり、今日まで「常識」「通念」としての地位を確保し続けている。

「一九九〇年代初頭に実現した旧ソ連の国家と党の機密（secret）文書の公開は重大な意義を持つ事件（event）であった」（Gregory ed., 2001, p.vii）。次の引用は、代表的ソ連経済研究者でありThe Soviet Archives（旧ソ連機密文書）を用いた見直し作業の中心に位置した研究者の最近の著作の書出し部分である（Gregory, 2004, p.1）。

The Soviet administrative-command economy（ソ連型行政指令経済、ACE）は二〇世紀最重要の社会的・経済的実験であった。ACEの失敗は、強制的あるいは自

日本の地方政治

—二元代表制政府の政策選択—

曾我謙悟／待鳥聡史 著 比較政治制度論からのアプローチにより、知られざる戦後地方政府の政治的ダイナミクスを描き出し、地方政治論に新たなパラダイムを拓く画期的論考。 5040円

民主化の韓国政治

—朴正熙と野党政治家たち 1981～1979—

木村 幹 著 野党政治家の挑戦と挫折、そして金泳三・金大中ら新しい世代の登場——民主化の成否を分けた前提条件を、朴正熙政権期から浮き彫りにした刮目の政治分析。 5985円

アトランティック・ヒストリー

B・ベイリン 著 和光弘他訳 大西洋を舞台としたトランプ、ナシヨナルなヒストとモノのダイミズム。歴史学最新のパラダイムの金鷲を、アメリカ史学の翬斗が浮き彫りにする。 2940円

マキアヴェリアン・モメント

—フイレンツェの政治思想と大西洋圏の共和主義の伝統—

J・G・A・ポーコック 著 田中秀夫他訳 新たな思想史の可能性とともに、シウイック・ヒューマニズムの動脈を掘り起こす、絶大な反響をよんだ名著。 8400円

モムゼン・ローマの歴史IV

—カエサル時代—

長谷川博隆 訳 ローマ史の最高傑作、遂に完結。共和政を崩壊に導くとともに新しい世界帝国を基礎づけたカエサルとそそぎつた、透徹した筆致で描ききった、全4巻の白眉。 7350円

名古屋大学出版会

〒464-0814 名古屋市中区千代田
TEL052(781)9353 / FAX(781)0897

一九八九年刊行の『日本経済史 全八巻』(岩波書店)で、一九三七年―一九五四年の時期を対象にした『計画化』と『民主化』(第七巻)の編者(中村隆英)は、『ソ連が『第一次五カ

年計画』による急激な発展を遂げた事実に伴う社会主義計画経済礼讃』が日中戦争開始直後に次々と統制が発動された歴史的背景の重要な一環を構成したとする。しかし、公開された情報に基く最新の研究はスターリン独裁下のソ連『計画経済』は『計画』に基づいて『計画的』に運営されたのではないことを示した。歴史的背景となった『社会主義計画経済礼讃』自体が誤解に基づいていた。

一九三三年頃から一九五三年三月の死去に至る期間のスターリンは a true Dictator であり、『計画』による

自らの行動の束縛を好まなかった。結果として“planning”(計画化)と呼ぶに値するものは存在しなかった。暫定的な「計画」と際限のない上からの介入の見通しの下に、企業や各省(ministries)はしばしば計画にcom-
bitすることを拒否した。スターリンとその側近たち(Team Stalin)が重要な意思決定を行い、大きな力を使用したとされたゴスプランの役割についても次のように修正する必要がある。「ゴスプランは重要であったが、強力ではなかった。驚くことに、ゴスプランは自らの力(power)を限定す

ることに熱心であった」(以上、Gregory and Harrison, 2005)。

一九三七年のスターリンのものと呼ばれるコメントである(同上、七三三〇頁による)。

計画の策定で計画化作業が終了すると考えられるのは役人だけだ。計画の策定は始まりにすぎない(傍線引用者)。

一九三〇年代から一九五〇年代の日本でも膨大な数の「計画」が作成され、多くの「政策」が「計画」に基づいて実施されたとされる。しかし、これらの観察事実から、この時代の日本を「計画化」の時代」と特徴づけることに疑問を抱く(抱き始める)読者が少なくないはずだ。

「赤い鳥」と「青い鳥」

疑問の矛先は、「通説」「常識」「通

念』における満州(国)の特別の位置、とりわけ、満州(国)における「計画経済」「経済統制」「産業政策」の成功物語およびそれが日本の「軍需動員」「経済統制」のための「計画化」の基盤となったとする「通説」「常識」「通念」に向けられるだろう。

日本の新聞・テレビなどでもおなじみのCalder教授が一九九三年(当時四五歳)に冒頭引用のような日本観を提示したという観察事実こそ注目すべきである。自問して欲しいと読者に求めた八つの設問はCalderのもではなかった。「赤い鳥小鳥、なぜなぜ赤い、赤い実を食べた……」という童謡を思い出そう。周囲に赤い実しかなかったのか、赤い実しか目に入らなかったのかは不明だ。しかし、赤い鳥しか目に入らず、目に入る鳥がみな赤いことに違和感を覚えなかったのだ。赤い鳥しか目に入らず、「鳥は赤いものだ」とする「常識」「通念」の壁の中

にしか世界は存在しないと確信し続ける限り、「赤い実を食べたためではないか……」という不安を抱くことはない。

童謡の三番は、「青い鳥小鳥……」で始まる。「軍部の暴走で……」というおなじみの解説が支配する世界の外側では「青い鳥」「金色の魚」「白や紫の花」が見つかるかもしれない。

* 本連載(四回予定)は三輪芳朗『計画的戦争準備・軍需動員・経済統制——統「政府の能力」(二〇〇八年春、有斐閣から刊行予定)の広告紹介文である。前号までに掲載の「1『軍部の暴走による先の戦争……』」「2『計画的戦争準備』?」は有斐閣書籍編集第二部ホームページ(<http://yuhikaku-nibu.txt-nifty.com/blog>)からダウンロード可能である。

(みわ・よしろう)＝

東京大学大学院経済学専攻教授